地の人へ、風の人へ。
浅間北麓じまんマガジン

きたかる

2019年
巡りめぐって浅間山 号

Since 2010
VOL.10

表紙の人・渡邉隼さん・めぐみさん・ゆめちゃんご家族

歌うように暮らす北軽ラブ・ライブ・ライフ！

「こんなこと言ったら変な人と思われるかもしれないですが、初めて北軽に来たとき『私、ここで死にたい！』と思ったんです！」。そう言って大きな目をクリクリ輝かせて豪快に笑うめぐみさん。10代の頃からベース・ギター・ボーカルとしてロックバンドやソロで活動。夫の隼さんもドラマーで、結婚、出産、東京から北軽への移住後も、同じバンドメンバーとして各地でライブも行ないます。数年前まで、めぐみさんは介護、隼さんは内装の職人として忙しく働きながら、休みには自然に癒しを求め各地のキャンプ場へ。あちこち巡ったなかでも、冒頭のセリフにあるように、北軽という場所との出会いは衝撃的なものでした。やがて年に数回通うだけでは物足りなくなっためぐみさんは、密かに人づてに家探し、職探しをスタート。「気づいたらまだ船もできてないのに筏の状態で出航させられてました！」と振り返って笑う隼さん。6歳になるゆめちゃん含め、今では移り住んで一年とは思えないほど北軽暮らしがすっかり板についてきた一家。「日々忙しいのは変わらなくても、ここでは周りの景色が見えなくなることはない。地に足がついてる実感があります（隼さん）」。「小さいことに感謝してばかり。毎日、浅間山に向かって『ありがと～う！』と歌いながら叫んでるんです！（めぐみさん）」

PROFILE：WATANABE JUN, MEGUMI, YUME／ この日は、キャンプ場に訪れていた頃から渡邉さん一家が常連として通う「ハコニワ食堂」のオムライスを、特別にアウトドアにケータリング！「おいしいね！」とぱくぱく食べるゆめちゃんは、春からピカピカの一年生。この冬初めてスキーを体験し、目下の将来の夢はスキー選手になること！めぐみさんと隼さんのライブ活動の詳細は、Webで「藤井めぐみ＆THE MOON」で検索を。

特集・早春浅間紀行

はじまりの森へ。

てっきり白と黒のモノトーンの世界を想像していたその場所は、意外にも色に溢れていた。

足元を覆うガンコウランやミネズオウなどのカーペットの朱色や黄色。丸くひび割れたメロンパンのような溶岩の褐色。ミヤマヤシャブシの樹皮の灰白色。大人の背丈に満たないミニチュアサイズのアカマツの若々しい緑――。

2月の浅間北麓。荒々しい鬼押出し溶岩の壁に守られるように静かに春を待つ〈空中庭園〉を訪れた。

火山が生んだ空中庭園

早朝6時前。空が白み始めたのにあわせて浅間園を出発する。「冬の浅間に足を踏み入れてみたい」。編集部のわがままな願いに、浅間園のS園長とジオガイドのFさんが同行役をかってでてくれた。

記録的に雪の少なかったこの冬。町内では標高の高いところにある園の周辺にも雪はほとんどなく、映画「八甲田山」のような道程を想像していたカメラマンMと私は、内心拍子抜け。とはいえ実際に雪深ければ、いくら中腹までとはいえ危険だし、そのあと目にする光景は見られなかったのだから、後から思えば幸運だった。

はじめは見慣れたミズナラの森を抜けていく。褪せたグリーンのままフリーズドライになってしまったシダがくったり頭を垂れている。少しずつ標高が上がるにつれ、周囲の木々は広葉樹からアカマツの針葉樹へと変わる。登山道にもさすがに残雪が増えてきたので持参してきたスノーシューに履き替えた。イノシシか鹿か、ふたつに割れた蹄の足跡が、行く手を縦横無尽に交差している。

積雪が浅いおかげで、このルート上に数百あるという溶岩樹型のうちのいくつかを確認できた。森林に入り込んだ火砕流が冷えて固まり、そのなかで燃焼した木の幹の跡が、今も落とし穴のようにぽこぽこと点在している。火砕流そのものの熱波からはなんとか耐えたのに、その後、堆積物に取り囲まれて、立ち木のままゆっくりと燃えたり腐ったりして姿を消していった木のことを考えると、なんともいえない気持ちになる。いっそ一瞬にして焼かれて灰になったほうが楽だったのではなかったかな…。そんな想像をしながらしばらく進むと、突然、急な崖が現れた。「この崖を越えれば浅間が見えますよ」。先頭を行くSさんと、しんがりで支えてくれるFさんに励まされ、慣れないスノーシューをバタバタさせながら崖を登りきる。

そして、その先で目にしたのがこの写真の光景だ。間近に迫った浅間山頂と、その手前に荒涼と広がる剥き出しの台地。そこにたくましくへばりついてじっと春を待つ、大地に根ざしたばかりの植物たち。

森は、山は、生きている。

通称「舞台溶岩」と呼ばれるこの場所は、浅間山の北東麓、上信越高原国立公園の特別保護地域内にある。「上の舞台」と「下の舞台」の二段構造になっていて、下段にある後者は3世紀頃の噴火に、上段の前者は1108年の噴火によって生じた地形だと言われている。そしてこのあたり一帯は、1783年の天明の噴火の際に発生した吾妻火砕流が流れ下り、一面堆積物に覆われている。つまり、古い火山活動による台地がパンケーキのように段々に積み重なったところに、今から約230年前、熱々のシロップで表面をコーティングされたようなもの。高温の火砕流の影響で、地表からはいったんすべての生き物が姿を消した。ひび割れた褐色の岩の塊が当時の熱の威力を生々しく伝えている。

浅間山の噴火の爪痕なら、鬼押出し園や浅間園の黒い溶岩の塊を見て、それなりに怖ろしさを実感しているつもりだった。でも、ここで目にする見知らぬ惑星に不時着したかのような光景は、噴火という事象のまた別の脅威を物語っている。ドロドロの溶岩がゆっくり迫ってくるだけでなく、時速百キロを超えるともいわれる数百度の熱風が、一瞬にしてすべてをなぎ倒し＜無＞にしてしまうということ。それも大昔の話ではなく、たった230年前に実際に起きたことである。

噴火により荒地となった大地には、まずコケ植物や地衣類が進入する。次にコケや地衣類の遺骸が保水力や養分を含んだ薄い土壌となり、草本植物が生まれ、続いてガンコウランなどの小低木が現れるようになる。さらに年月が経つと、貧栄養の土地でも生息できるカラマツやアカマツ、ミヤマヤシャブシといった陽樹が侵入し、樹木が育つことで徐々に森林へと変わっていく。

ここ舞台溶岩は、いったんゼロにリセットされた土地が長い時間をかけて森へと移り変わる植生遷移の、ほんの＜はじまりの段階＞が見られる希少な場所なのだ。ここも数十年後には、森が育ち、カーペット状の低木は姿を消していくだろう。さらに数百年が経過すれば、陽樹林からシラビソやコメツガなどの陰樹林へと変わっていくという。（もちろんその間、大きな噴火がなければ…の話だが。）

いま私たちが目にしている森の生まれ変わりは、いったい何回目の＜はじまり＞なのだろう。浅間山が、いまの山のかたちになるまでに、何回の破壊と再生が繰り返されたのだろう。ぼんやり途方に暮れていたら、突風に体が煽られた。雪はなくても風はまだまだ冷たい。早めに下りましょうと促され、山に背を向けて歩き出す。

次に来るとき、景色はもう今日と同じではない。でもその変化を――大地の遷移の物語を――身をもって体験できることは、生きた森、生きた山と隣合わせにいる私たちの特権であり、幸せであると思う。

浅間山の活動の歴史を体感できるフィールド・ミュージアム

「スカイロックトレイル」を歩こう！

2018年春にオープンした浅間園を出発地とするトレッキングコース。ここに紹介した舞台溶岩をはじめ、噴石やクレーター、溶岩樹型などの地形と、そこに生育する高山植物やパノラマの景色を楽しめる変化に富んだルートです。

●コース：1周約6km、所要時間は3～4時間。●浅間園認定ガイドによる同行が必須。要事前予約。（2019年度は5月中旬オープン予定）

●問い合わせは「長野原町営浅間園」まで。

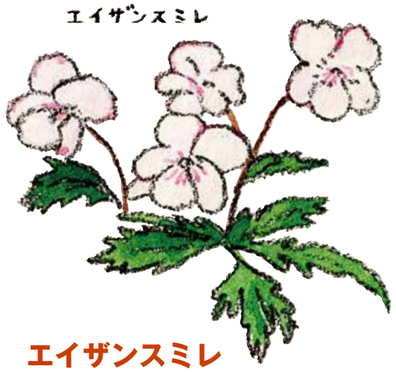
浅間高原 私的・山野草観察図鑑！

ハナネコノメソウ

あまり目立たないのですが、実に魅力的な花をつけます。北軽周辺では浅間大滝付近の岩場で見られます。きっとネコノメソウのイメージが一変することでしょう。
（嶋村 明／浅間山北麓ジオパークガイド）

ホタルブクロ

初夏から夏の間、道端でよく目にする「ホタルブクロ」下向きに咲く涼し気な花姿が、とても愛らしいです。
（徳間 美香／北軽在住 33 年、園芸家）



エイザンスミレ

北軽でも山の中の崖の上など乾いている陽だまりで見かける小さくて可愛い花。スミレなのに葉の先がとがっているのがめずらしくていい。
（干川 絹枝／花卉農家）

ワレモコウ

「The 山野草」と言える。ひっそりといるのに存在感抜群。諸説あるが名前の由来となっている通り、われもこうありたい。
（福嶋 淳平／北軽 U ターン 10 年）

アケボノソウ

一見、地味で通り過ぎてしまいそうだけど、よく見ればとっても SF チック！宇宙人！
（石田 康之／建築・設計）

ギンリョウソウ

全体的に白く透明感のある美しい植物。ユウレイタケの別名も持つ不思議さん。
（石田 康之／建築・設計）

マツムシソウ

小さい頃は山荘近くの草原にも群生地があり、８月の終わり頃、一面紫色の花畑になっていました。今では、浅間牧場内の天丸山で楽しむことができます。
（藤野 麻子／編集部）

イチヤクソウ

日陰に咲いているのをよく見る。イワカガミに似ているけどそれよりもっと鈴なりで、ピンクに群生してとにかくかわいいんだよ！（干川 絹枝／花卉農家）

ウメガサソウ

庭のコナラの大木の足元に隠れていた花。うつむいて咲く白いうなじが、セクシーでキュート。
（津田 美代子／北軽在住 16 年）

ヤナギラン

ロシアにはどこにでも咲いています。雑草のようなもの。「イワン茶」と呼ばれる健康茶で、ロシア人なら知らない人はいません。解熱作用があって、エネルギーをもらえます。
（イリナ／ 10 年来、毎週末北軽に通う別荘人）

マイヅルソウ

鶴が舞っているようには見えないが、ツヤツヤするハート形の葉っぱ、プチプチと弾けたようなシベはとても愛らしい。赤い種まで愛らしい。
（山﨑 悠貴／編集部）

浅間牧場に群生。繊細な花だが日陰に群生している姿は力強ささえ感じて見入ってしまう。
（石渡 江里子／山の音楽家）

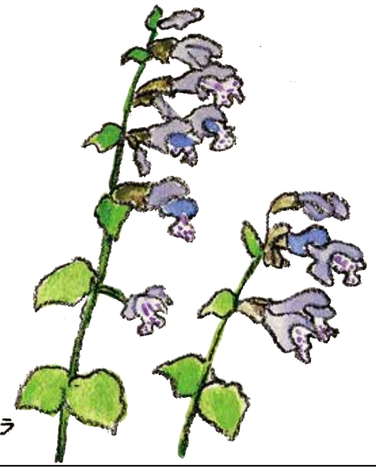
キツネノカミソリ

第一印象は「名前負け」、それでも小さい体で背伸びして、空に向かって咲く姿がなんとも愛らしく、気づけばお気に入り。調べてみると「タヌキノカミソリ」もあるそう。
（野口 大介／キャンプ場勤務）

フデリンドウ

初春の落ち葉一面の森に、ちょこんと顔を出す姿がかわいい。小さい花束みたいです。（丸山 彩香／会社員）

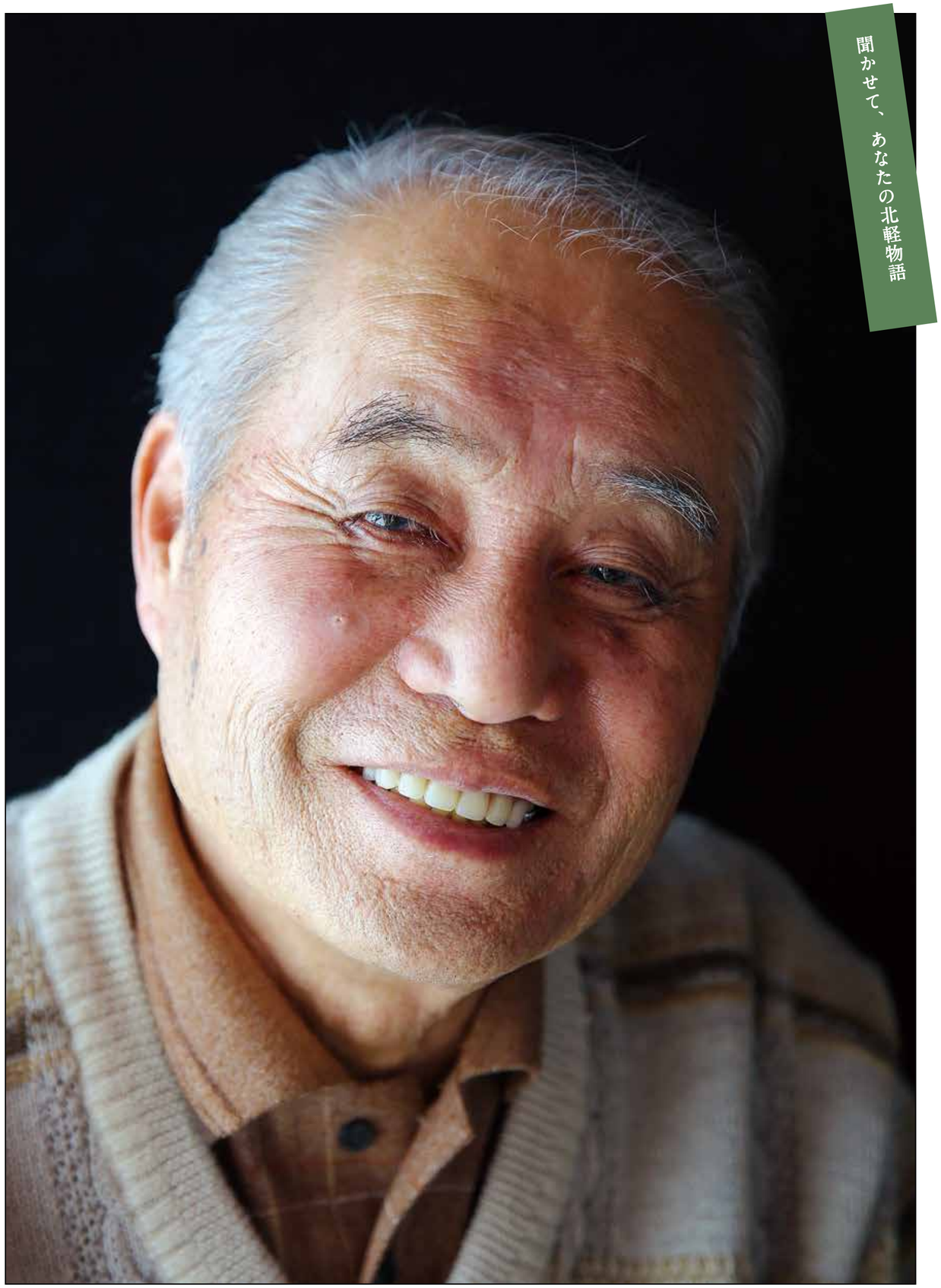
春になると家の駐車場の脇に毎年５～10cm 程の小さな花を咲かせます。日があたっている時だけ開き、曇りや雨の時は名前のとおり筆先の形をした蕾状態になって閉じてしまいます。しかし、花が終わって種ができると、雨降りの時に種を飛ばすそうです。
（古屋 祐之／ペンションオーナー、ジオガイド）



ラショウモンカズラ

初夏独特の爽やかな紫の花がきれい。見とれながら、名前の由来を思い出し、ブルっとします。
※花の形が、羅生門の鬼女の切り落とされた「腕」に似ていることから付いた名とされる。
（丸山 彩香／会社員）

イラストレーション／加藤彩子



友達には「七変化だねえ」なんて言われたね。いい仲間と家族が支えてくれたからやれたんさ。

（萩原要（かなめ）さん・84歳）

本業の土木業では北軽井沢をはじめ町内や近郊の道路整備を一手に引き受け、同時にPTA会長（本人いわく「おてんま会長」）や議員を歴任。はたまた北軽井沢観光協会長を務めた26年の間に「炎のまつり」や「マラソン大会」など現在の北軽の風物詩となったイベントの基礎をつくるなど、北軽井沢の発展をまさにハード・ソフトの両面から支えてきたのが、この方、萩原要さん。

今も栗平の実家近くに兄妹が揃って暮らし、百歳を超えるお母さんをみんなで介護して看取るなど、地元では〈萩原ファミリー〉といえば仲の良いことでも有名です！

持つべきものは家族と仲間。そう話す要さんに、地域の活性と発展のために走り続けてきた半世紀以上の年月について聞きました。

大正元年生まれの親父は、近くにあった寺子屋で夜学で勉強して昭和5年に土木業を始めた。栗平は林業が盛んで、大きな会社が何人も雇って枕木を作ったり薪炭をやってた。木を伐り出すにも道がいるわけだから、親父が林道をつけてね。

俺は5人兄妹の長男で、小さい頃は遊ぶったって家の手伝いが多かったね。ボヤ（薪）集めや草刈りやヤギの世話。でも中学2～3年の頃かな、三原に芝居小屋がかかると電車（草軽電鉄）の終電に飛び乗って見にいってさ。芝居や踊りなんかは好きだったね。〈いいけんぺぇ〉（いい加減）だったんだよ（笑）。このへんは夏の間、よく東京の学生が勉強しにやってきて、うちの隣にも東大の優秀な学生さんが滞在してた。そういう影響を受けたんだかわからないけど、俺自身は商人になりたいって思いもあって、高校は早稲田実業へ。勉強なんてたいしてしてなかったけど、高3になってお袋から「長男なんだし父ちゃんの商売継いだらどうだい」って言われて、そこから頭を切り替えて土木の勉強しに大学に入った。本気で勉強する気持ちが湧いた頃、親父が具合悪くなったから休学して家に帰って手伝いして。親父が良くなってまた大学戻れって言われたけど、俺がイヤんなってそのまま残った。

仕事はおもに県や建設省からの道づくり。長野との県境から羽根尾までの国道146号、あれはほとんどうちがやった。今の道になる前の、応桑から古森あたりまでが勾配が急で難所だった。設計者が線を引いても、地質には硬いところや脆いところもあるからそういう苦労はあらいね。中学（長野原西中）の校舎の建て替えもやった。当時の町長の発案で生徒全員が集まれる食堂を別棟で建てるってなって、そのときはちょうど議員もやってたからあちこち視察にも行って。いざ作るとなったら金が足りないって揉めたけど、町も説得して。一緒に食べれば先輩後輩の交流も生まれるしいいよねぇ。結局今も残ってる。

観光協会の会長になったのは昭和58年から。俺は建設だから観光はやだよって言ったんだけど、地域の活性化のためにって言われて。夏祭りの花火も寄付金集めるのに草津や中之条の仲間にも声かけて。今の「炎のまつり」のおおもとは「樹氷（やくし）まつり」っていって、櫓を組んで枝をかけて夜中に水をかけて凍らしたんだ。結構きれいで評判にもなって、なのにパテント（特許）の問題でダメだって言われて。そこから氷の彫刻やったりローソクを並べるようになって、場所もグラウンドから浅間園に移した。そしたらまたローソクの関係で権利がどうこう言われて、いやあ、イベントを興すのもヨイじゃぁねえんだよ（笑）。マラソン大会も、そういうアイデアがあるっていうんで、道路の許可を取ったりあちこちに掛け合って。口蹄疫の問題で休んだりもしたけど、今も続いてる。イベントでもなんでも、俺なんかの頃は行政頼みじゃなく自分たちでやらなきゃ、仲間みんなでやるべって意気込みがあったんだね。

結局、観光協会長は26年、議員は6期やった。仕事もやりながらだからね。議会に行くときも作業着持って行って、終わったらすぐ着替えて重機に乗ったりするもんだから、友達には「要さんは七変化だねえ」なんて言われて。それもみんないい仲間がいて、家族が支えてくれたからやれたんだね。この場所は俺に合ってるところだよ。

笑え、浅間っ子！

6年ぶりの県大会出場で躍動！「北軽井沢野球クラブ」

「よーし、じゃあノックいくぞー！」監督の声が体育館内に響くと、子どもたちも元気よく返事をして守備位置に駆け出していきます。長野原町営体育館での室内練習。ほんとうなら外のグラウンドを借りていたのですが、雪の影響でぬかるんでしまったため、この日の練習も屋内で。せめてこの日くらい、外でのびのびと練習をさせてあげたかった…。というのも昨年秋に行われた吾妻郡大会で準優勝。6年ぶりの県大会の初戦が1週間後に迫っているからです！

部員は野球を始めて間もない下級生も含めて13名。「試合をするにもギリギリなのは、僕らの頃も今も変わらないですね」と話すのは、OBで監督の重原さん。おまけに冬場はグラウンドは使えず、練習は体育館やビニルハウスの屋内のみ。それでも子どもたちはスケートや雪合戦などと掛け持ちで、地道な練習を続けてきました。

そして、いざ決戦の日！会場の前橋の敷島球場には北軽からの大応援団も駆けつけました。結果は残念ながら3対7で二回戦敗退。でもその日の様子を北軽小の山野校長先生がこう教えてくれました。「風が強く砂埃舞うなか、選手はもちろん一年生もボールボーイをするなど、それぞれの持ち場でチームがひとつになってがんばりました。翌日チームが校長室に挨拶に来たとき、『次の試合に向けての課題が見つかった人？』と聞くと全員が手を挙げたんです。これからの成長が頼もしく楽しみです」

人数が少ない、冬場に土の上で練習ができないなどのデメリットがありながらも、明るく元気に野球を楽しむ子どもたち。女子も紅一点でがんばっています。「新学期からの新メンバーも待ってます！」

北軽あるある

当地のゴールデンウィークといえば、
来る人も迎える人も、盆暮れ正月いっぺんに来たような騒ぎとなるのがお約束。
一夜にして人口は数十倍に膨れ上がり、
人も動植物も強制参加の「祭り」のようになる。
そして絶対に誰の思い通りにもならない…。
悲劇であり喜劇でもある、北軽のGWの舞台裏をのぞいてみよう。

「GWの裏っかわ」

「あるある１」
年によって、春だったり、
夏だったり、冬だったりするため、店
の仕入もタイヤのはき替えもほぼ博打

「あるある２」
「お稼ぎなさい」という挨拶を皮切りに、
繁忙期入りを自覚する
※「お稼ぎなさい」とは、御精が出ますね、
繁盛するといいね、頑張りましょうね
といった意味合い。
商売をしている人に対する地元の挨拶

「あるある３」
少しずつ咲けばいいのに、
全部咲く
（桜、チューリップ、コブシ、
クロッカス、ムスカリ、水仙、
レンギョウ）

「あるある４」
宿泊客が来る予約前日まで
やる気が出ない
（あまりの静けさに、狐に化かされ
ている気がしてならない）

「あるある５」
鳥たちの恋の季節も重なって、
暗いうちからすごい騒ぎ
（控えめに言ってもうるさい）

「あるある６」
コンビニの棚に残っているのは
「梅おにぎり」以外ない

「あるある７」
パンフレットのイメージ写真は新
緑、実際はまだ芽吹き前
※ 木の芽吹きは、草萌えよりも
ずっと遅い

「あるある８」
GW最終日の夜に感じる高揚感、
見ず知らずの地元の人さえ
「戦友」に見える

「あるある９」
GW明けの虚脱感、
誰一人として隠す気がない

イラストレーション／NANA

「きたかる建物応援団」がゆく！

〈第七回〉旧田中銀之助別荘

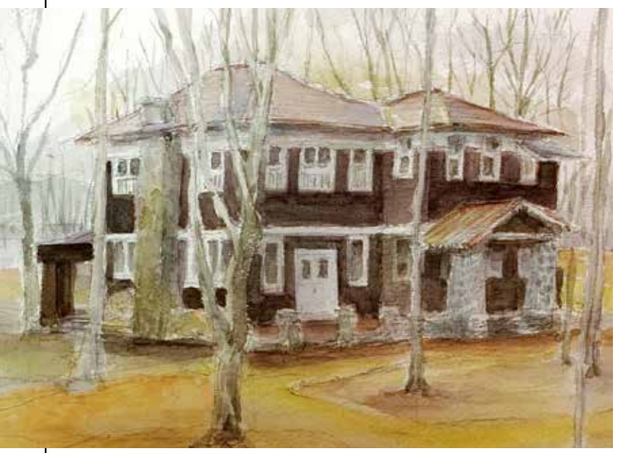
北麓別荘地開発のさきがけのいえ

絵・文　伊郷吉信
「自由建築研究所」代表、協同組合「伝統技法研究会」副理事。NPO「あさま北軽スタイル」理事。設計活動とともに、建物保存活用のためのアドバイス、調査、研究を行なう。「こぶしの家移築プロジェクト」「狩宿茶屋本陣調査」等、北軽井沢・長野原町とも縁が深い。

旧田中銀之助別荘周辺の森の土は四季折々異なった表情を見せる。落葉の鮮やかな黄色からやがて褐色の土色になる。春には落葉の中から子葉が頭を出す。いつでも美しいグラデーションが繰り返される。森の営みだ。

ちょうど11年前、はじめてこの家に入った。恐る恐る手探りで。屋根の一部は雪の重みに耐えかねて落ちていた。床も所々落ちて足を踏み外しそうになった。その時、この家は、もうすぐ土に帰るのだろうと思った。

平成21年に、建物を記録にとどめるたいと調査をさせていただいた。広い！ダンスが踊れそうな40畳大の居間。12畳半もある和室が1階に2部屋、2階にも2部屋ある。タイル張りの浴室は8畳で化粧室も8畳大ある。使用人の浴室でも8畳大だ。すべてが大きく出来ている。例えば、北軽井沢の大学村では当初15坪以下の別荘が多かった。8畳の居間に、6畳の寝室がある程度。ここは別荘と言われても考えが及ばない。



調べると建物を建てたのは田中銀之助。明治から昭和にかけて活躍した実業家である。「天下の糸平」と呼ばれ、横浜で生糸、洋銀などの相場で財をなした田中平八の孫にあたる。英国のケンブリッジ大学に学び、ラクビーを日本に伝えた。酒豪で豪放な気質であったという。銀之助は、南に浅間山、北に白根山から谷川連峰までパノラマが広がる豪快な御所平の土地が気に入り、手に入れたのだ。建物内には電気の配線がなされ、ボイラーで給湯が行われていた。梁に大工が墨さしで大正9年と走り書きをしていることから、建物の創建は大正9年頃である。この頃、近くに草軽軽便鉄道が通り、電気をいち早く取り入れたと考えられる。

廃墟同然のこの家にも、平成22年、転機が訪れた。自然に従う生き方をコンセプトにした「ルオムの森」の中心施設として修理が行われたのだ。今は、図書室やカフェ、ギャラリーとして使われている。痛みのひどかった浴室や使用人のスペースは解体され、畳の和室は床板が張られたが、主要な空間はそのまま生かされている。

この建物には、自由に自分の居場所を選択できる広い空間がある。時を忘れて、いつまでも離れたくなくなる空間がある。気がついたら森に囲まれている。……そうだ、それは田中銀之助が愛した森のせいなのだ。

リニューアル復刊以来、編集部に届いた読者の方からの感想やご意見のなかから、一部をご紹介します。

●以前から北軽のあちらこちらで手にして楽しませて頂いていました。引き続きの発行を楽しみにしています。（大学村・女性）
のんびり発行ですが、これからもぜひお付き合いください！

●いつも田淵親子さんの写真に魅せられています。「きたかる」を楽しみにしています。（大学村・女性）
そうでしょう、そうでしょう。読者より先に田淵親子の写真が見れるので編集部が辞められません。

●素晴らしい写真と記事満載の冊子楽しみにしております。「大学村だより」に一寸だけ関わっているものとして大変参考になります。（大学村・男性）
西へ東へと走り回って取材し、寝ずに文章をひねり出し、日付が変わっても続く編集会議も、そう言っていただけると報われます。

●北軽在住50年近くになります。（夏のみですが。）こんな素敵なタウン誌が出来ているなんて幸せです。北軽の素晴らしい自然と生活をもっともっと紹介していって下さい。（大学村・女性）
北軽歴50年の方にお褒め頂き光栄です！

●新潟から来て44年。ここが私の故郷、子供たちのフルサト。応援してます！（長野原町内・女性）
「きたかる」を10年出し続ければ「郷土史」になるかも？これからも応援お願いします。

●8号に昨夏おいしいジェラートをいただいた星野さんが表紙で紹介されていて家族で読みました。今年も食べに行きます。（千葉県・女性）
星野さんのジェラート、絶品ですよね。私のおすすめは「星野ファームミルク」と「山ぶどうソルベ」です。

●北軽井沢のファンがおすすめする見どころ、遊び方などを特集してはいかがでしょうか？（高崎市・男性）
北軽きっての北軽ファンが編集部を作っていますが、全員全然違う興味があり、企画をまとめるのも一苦労です。ケンカにならないよう、号数を重ねるしかなさそうです。

●掲載する人はどうやって選んでいるのですか？私も出たいです。（多数）
いろいろが時の運です。まずは飲みにでも行きましょうか。

●（2018年フリーペーパー大賞部門賞の）受賞おめでとう！（大学村・谷川俊太郎）
7号では素敵な詩の書き下ろしをありがとうございました。編集部の宝物です。

●私は北軽生まれの浅間っ子です。現在は主人のふるさとの九州に住んでます。里帰りした時に駅で「きたかる」見てからのファンです。故郷を離れた者にとって「きたかる」はとても嬉しいフリーペーパーです。（熊本県・女性）
故郷が恋しくなったら「きたかる」を開いてください。いつも北軽の風が届きますように。

●火山博物館で見つけて、5、6、7、9号拝見しました。写真が素晴らしい！内容も興味深い！クマゲラ、3～4年前鎌原の少し上の谷間の道で見ました！「私的野鳥観察図鑑」に是非入れて頂きたいのがオオルリ、火山博物館の散策路で見つけました。アヤメが原別荘地ではハイタカの巣、子育て中のノスリに威嚇されたことも。5月の連休には毎年野鳥観察で楽しませてもらっています。（別荘客・女性）
野鳥観察は編集部内でも異様な盛り上がりを見せましたので、いずれ第一弾が組まれると思います。ぜひ鳥情報をお寄せください。

●自然の中で生活してみたい、と思っている都会暮らしの人間はいっぱいいるのでしょうが、実際は難しい。でも憧れがある、そんな人の心にぐっとくるのでは。地元の人にとっても、当たり前の風景が違ってみえてくるすてきな内容だと思います。おばあちゃん、おじいちゃんのしわがすてき。みなさんの笑顔が輝いています。広告がないところもやっぱり魅力ですね。（東京都・女性）
「しわ」の魅力に気付いたアナタは通な人！北軽には魅力的な「しわ」の持ち主がたくさんいて困ります。

●浅間園を訪れ、「きたかる」がフリーペーパーのコーナーに有るのを見つけました。帰ってユックリ目を通すと良く有る地方の広報とは違い、とてもセンスの良い紙面に吃驚しました。地元の方の写真も表情が生き生きして、とても身近に感じました。昔の大学村の様な、アカデミックな気分に浸れてとても良い気分です。（男性）
アカデミック！

●スイートグラス近くにたまーにやってきてはのんびり過ごしたいと思いつついつもバタバタで最後はお掃除おばさんに変身して疲れて帰りますが、今日セーブオンで「きたかる」を初めて拝見しなんだかうれしい癒しを頂きました。北軽井沢の良さがとっても伝わり感動して隅々まで読みまくり楽しかったです。次号も期待しています！（別荘客・女性）
これからも隅っこまで読んでもらえるよう気合を入れて発刊します！

●北軽井沢に小さな小屋を買って二十年。この二十年の間にも多くの店舗が閉まり、もう何年も人が使っていないように見える別荘、職の不足、買い物難民、若者離れ、七十歳以上の免許返納などワイドショーで取り上げられるテーマが、程度の差こそあれ「ここ」にも存在するのを実感するようになる。軽井沢でも草津でもない北軽井沢という不思議な場所の、他人に伝えにくい魅力が「きたかる」本紙にもある。それは作っておられる方々の思いが嘘無く詰まっているからだろう。（別荘客・二重生活・男性）
北軽のさらに20年後はどうなっているのでしょう。不安も期待もありますが、今できることをコツコツ続けたいと思います。

編集後記

移住者の人から見た北軽井沢は元々遊びに来る場所であり、非日常のワクワクを感じる場所だったかもしれない。でも地元出身の私にとってこの土地は、日々耐えなければならない日常生活の印象の方が強かった。吹雪に吹かれる通学路、学校という閉鎖コミュニティーでの義務教育、自分の足では買い物にも行けない。そんな環境で育つこの地の若者は、一度は外に出てみたいのだ。そして2度目の成人式も過ぎ、戻ってきたこの地は少し違って見える。都会の人から見た感動や魅力を自分も感じるようになっていた。子供時代をこの環境で過ごすことができたことに感謝する。そして一度外の世界で過ごせたことにも感謝する。フリーペーパー「きたかる」は、その「北軽井沢っていいところだよねー」という言葉をそのまま可視化して、魅力と価値をブランド化し、この地を知らない人を上手に導いてくれている。これがなかったら地元の人も地元の魅力には気が付かなかったかもしれない。私はそのちょうど真ん中あたりで、自分には何が伝えられるだろうと日々考えている。（M）

ツララをしゃぶったり、池に浮かぶ白鳥を数えたりしているうちに、こっそりと春がやってきた。もっとじっくり冬を味わいたいと思っているのに、気付くと春が来てしまう。そうして冬を惜しみつつも、日増しに大胆になっていく春を感じて、節操なく胸ときめかせてしまうのだ。木の芽の膨らみや落ち葉に隠れるクロッカスの蕾を見つけては、鼻の下をのばしてデレデレしている。しかし、ひとりでニヤついていて怪しい人だと思われても困る。今年のGWは十連休と長いので、本誌を片手に読者の皆さんにも是非ニヤニヤ・デレデレしていただきたい。雪の残る浅間を裾野から望むもよし。誰かのお気に入りの山野草を探して歩くもよし。一人でも多くの人がニヤニヤしてくれたら、大っぴらにニヤニヤできるようになって嬉しいし、編集部冥利に尽きる。（Y）

きたかる vol.10
２０１９年４月発行
企画・編集・制作／きたかる編集部
［編集長］藤野麻子［編集］山崎悠貴・ウッド美幸　［写真］田淵章三・田淵三菜（森の写真館）［デザイン］田淵章三［WEB 制作］G+G・AKIKO
発行／北軽井沢じねんびと
印刷／上毛新聞 TR
※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。

お問合せ：きたかる編集部
メールアドレス：info@kitakaru.me
住所：〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1987-362
北軽井沢駅舎内
「きたかる」へのご意見・ご感想をお寄せください。

「きたかる」ホームページ　http://kitakaru.me
北軽井沢の季節の風景、イベント、取材こぼれ話など、WEB 版も更新しています。

※本誌掲載の写真・文章を無断で複写・複製・転載することを禁じます。